宮内省藏版

マツノ書店二百点記念出版

補修 殉難録稿

個々の史伝を積み重ねて
維新史を構築する壮大な試み

限定五百部復刻

マツノ書店

書き改められた龍馬の葬儀　一坂太郎

「人物幕末史」ともいうべき『修補殉難録稿』は、各府県から提出された「志士」の履歴をもとに、宮内省で編纂された。一世紀にも前に著された本書を紐解き新鮮に感じるのは、簡潔ながらも美しい文章である。「お上」が編纂した歴史書にありがちな、無味乾燥なイメージとは程遠い。文学と史学が、共存共栄していた時代の産物なのだ。

凡例によると、当初は文体を『平家物語』『太平記』に倣おうとしたという。さもあらんと思わせるほど、日本語の美しさをあらためて認識させてくれる。いま、ためしに「高杉春風（晋作）」の部分を声に出して読んでみると、知らず知らずに節が付き心地いい。

だからといって『修補殉難録稿』は、史実、史料を軽視していない。『殉難録稿』は明治二十六年（一八九三）六月から四十年十二月にかけて編纂、刊行された。これに二年の歳月を費やして修正の手が加わり、このたび復刻される『修補殉難録稿』が完成する。その過程を示すものとして、以前私は、次のような「発見」をしたことがある。

明治四十年に刊行された『殉難録稿』の「坂本直柔（龍馬）」によれば、慶応三年（一八六七）十一月十五日、京都で暗殺された龍馬の葬儀は、十八日八ツ時（午後二時）から行われた。棺は海・陸援隊士らに護衛され、幾千もの群衆（中には数珠を片手に、涙ながらに題目を唱える者もいた）が見送る中、市街を抜けて東山霊山に埋葬されたという。これは土佐出身の元勲田中光顕の回顧談がもとになっているようだ。

さらに白昼堂々の葬儀の話は、岩崎鏡川『坂本龍馬関係文書』や平尾道雄『海援隊始末記』など、古典的な龍馬本にも紹介され、広く知られてゆく。暗殺現場に駆けつけ、陸援隊幹部として葬儀にも参列した田中の談だから、疑問視されなかったのかも知れない。

ところが当事者の談とはいえ、この話は信憑性に乏しい。たとえば、海援隊士宮地彦三郎は十八日朝、兄に書いた手紙で龍馬の葬儀を「昨夜相済ませ申し候」と知らせている。他にも十七日夜に葬儀が行われたことを示す史料が存在する。私は田中が、出来るだけ華やかな「龍馬英雄伝説」を創作するため、盛大な葬列をデッチ上げたのだと考えている。

その事に、編纂者は気づいたのだろう。『修補殉難録稿』では、同じ部分が「十七日の夜、藩命に依り、海援・陸援の両隊及び諸藩の志士等、遺骸を護って之を東山鷲尾にかくし葬りぬ」に変わっている。龍馬は当時、幕府のお尋ね者なのだから、こちらの方が合点がゆく。史料に沿って書き改めようとした編纂者の姿勢がうかがえる。

なお、『殉難録稿』の龍馬の部分が編纂、修正された当時の宮内大臣は田中光顕だった。編纂者との関係が、気になるところである。

■このたび復刻する原本は昭和八年に吉川弘文館から刊行された『修補殉難録稿』全三巻です。その後七十二年間、再版も復刻もされていません。

■長く埋もれていた本書の復刻を早くから薦めて下さったのは、萩市特別学芸員・一坂太郎氏です。また復刻に際しては、大久保利通の曾孫であり、明治維新史研究の泰斗・大久保利謙先生のご子息でもある大久保利泰氏のおかげで、難関と思われた宮内庁関係はすんなり行き、本書の版元吉川弘文館のご了解も早々に得ることが出来ました。関係者各位には、この欄を借りて厚く御礼申し上げます。

■今回の復刻版は、末永く座右に置いて頂くため、やや薄く軽い用紙を使用して全一巻の堅牢で開き易い実用的な装幀にしました。

■体　裁　A5判上製貼箱入千六百頁
■定　価　二万四千円（〒590円）
■予約特価　二万円（〒共）
■特価締切　平成十七年一月末日（厳守）
■発　売　平成十七年三月中旬

限定五百部復刻（番号入）
▼書店不卸　▼締切厳守　▼分割払可

〒745-0032
周南市銀座2～13
☎〇八三四㉑二一九五
マツノ書店
URL http://www.matuno.com
E-mail info@matuno.com

内容見本

蓮田正實

蓮田正實。通稱を市五郎といふ。水戸藩士榮助宗道の子にして、町方同心たり。幼時父に後れ孤となる。學問を好みけれど、家貧しく紙筆を購ふべきすべなければ、三たびの食を減じ、その費に充てんと思ひ起し、日より、飢を忍びて勉め學び、日夜怠る事なし。きくもの感賞して、この子他日成立する所あるべし、凡人の及ぶべきにあらずといひあへり。安政の初に、寺社方の手代となる。齋藤一德は神官なれば、職務につきていと親しかりけるにぞ、遂に相かたらひて、櫻田の一擧に同盟し、事はて、後、本多修理亮にあづけらる。幕府の有司これを糺問し、汝等徒黨を聚め大老を擊たんとする事、上を犯すの罪免る可からずと雖も、にげ隱れもせで、自首したるこそ神妙なれ。そも〳〵君の祿を食むもの、其命に從ふは理の當然たり。徒に身を殺すをもて義とすべきにあらず。こたびの事、まのあたり君命を受けずとも、必ず傳へ聞く所ありて、思ひ立ちしなるべしといふ。正實おめたる色なく、こは存じもよらぬ仰かな。和君は前中納言殿が罪蒙りし事、大老の所爲に出でたるを以て、我等に命じこれを打取り、怨をはらしゝとのたまふか、まことの給ふ如くならば、水戸の家臣數千人に下らず、などその人なくして、賤しき我々が刺客の謀を用ひたまふ事あるべき。こたびの事は、水戸家臣のみには非ず。薩摩の人もまたそのむれに入りたれば、君命にあらざる事を知らるべし。抑前中納言殿は、上を敬せらるゝ事よの常に超えたり。こたびの事をきかせ給はゞ、驚き憂へさせ給はん事、我等に於ても心苦しきかぎりなり。只今の仰、かけても存じよらぬ事なりと申しゝかば、有司かさねて、さらば何故かゝる大事を企て、且は名義の正否を辨へざるやといへば、正實仰には候へども、前中納言殿の忠誠無二の名君たるは、天下の遍く知る所なり。しかるに幕府常にこれを疑ひ給ふ故、かゝる事さへの給ふなるべし。それに引かへ、大老井伊氏は、朝旨をおし遏め、祖先の法を壞り、擅に夷狄を近け親藩を擯斥す。是天下の罪人にあらずや。天下の浪人を以て、天下の罪人を討たんに、他人の指圖をうくる事やある。罪魁を除き國運を挽回することを得ば、身死して餘榮あり。これ小義を捨て大義を取るなり。如何なる拷問にあふとも、前中納言殿に無實の罪をおはせ參らする事は得せじと申切りてければ、有司もその忠誠をや感じけん、また問ふことも無かりけり。正實窃にこの問答の詞を筆記し、その奥書に、幕吏もし誣言して、我老公に連累せば、吾死すとも目を瞑すること能はず。後にこの書をよむものあらば、吾一點の血誠を亮察して、不遜の言を咎むることなかれといへり。斬られし時、年は二十九なりとぞ。

内容見本

鯉淵鈴陳

鯉淵鈴陳。要人と稱す。父を數馬義長といふ。常陸國茨城郡下

▼本書の序文には「採録の人員二千四百八十余人」とありますが、水戸の藩士・郷士のうち千二百人余りが事蹟不詳で姓名のみ掲載されており、それでも巻末掲載の「人名索引」にある、つまり解説文の載っている志士は千二百八十一名です。
▼本書の人名は大要左記のようなテーマで分類してあり、事件ごとに読むには興味深く非常に便利です。
戊午党獄、桜田、東禅寺、坂下、等持院、寺田屋、大和、但馬、池田屋、水戸（磯濱・那珂・藩内・筑波）、長州（禁門訴冤・藩内内訌・四境防戦・異船砲撃）、福岡、対州、加州、因州、姫路、徳山、広島、膳所、村松、肥後、英彦山、江戸薩州藩邸、野州出流山、土州、付録。

史伝としての『殉難録稿』

紀田　順一郎

維新人名の伝記資料『殉難録稿』が、今日一種の人名辞典として広く利用されていることはいうまでもないが、じつは史伝の前駆的な性格も備えていることについては、ほとんどふれたものがない。私は『殉難録稿』という史料は、むしろこの史伝的側面を知ることによって、一層の活用が期待されるものと思っている。

各府県を対象に、維新殉難志士の履歴を進達するようにという内務省令が出たのは明治九年（一八七六）であるが、その集録が宮内省の担当に決定したのは八、九年後らしい。当時すでに各県からおよその資料は提出されていたものと考えられるが、それを活版にして配布を開始したのが明治二十六年であった。参謀本部の『日本戦史』もこの年に刊行がはじまっているので、政府側の二大史料の上梓が実現したといってよいが、見逃してはならないのは勝海舟の『開国起原』など旧幕府関係者、佐幕派の伝記や回想録、雑誌などが明治二十年代から盛んに出版されるようになり、むしろ後者のほうが圧倒的に量が多く、優勢であったということである。

本書の中心的な編集者外崎覚（一八五九～一九三二）が、いわゆる勤王派を中心とする殉難者の伝記の集録作業を行うに際し、このような客観情勢を意識したのは疑いないところである。彼が陸奥弘前藩（青森県）の儒者工藤他山の次男で、東奥義塾で漢文をおしえながら川田甕江、三島中州に学んだということは、川田の師が大橋訥庵である以上、系列からは尊攘思想の流れの中にいる。しかし、その著書『永懐録』（一九一〇）や『六十有一年』（一九二二）にてらしてみても、後のいわゆる皇国史観に支配されているようには見えない。あくまでも非命に斃れた先人を顕彰したいという客観的な意図に基き、そのさい類書に乏しい勤王派の志士および関係者に重点を置いたということであろう。

ただし、外崎が機械的な人名羅列の編纂を意図したのでないことはいうまでもない。志士に対する心からの哀悼の思い、あるいは同情や共感の念に駆られたのではないかと想像される。今日『殉難録稿』を繙く者が先ず気づくことは、本書の維新通史的な叙述スタイルであろう。それは個々の伝記を積み重ねて全体としての維新史を構成するということ、あるいは維新史の中に個々の伝記を散りばめるという、独自の方法である。これをもって、戸崎は壮大かつ叙事詩的な維新通史を意図したのであろう。凡例において「各伝の文体は、最初平家物語、太平記に倣ふと雖も、半以降に至りては、必ずしも其例に依らず」と強調しているのが、その証しである。

この意図が成功しているか否かは断定し難いとしても、外崎が志士の運命を描くにふさわしい叙事詩風の文体を意識していることは、戊午党獄（安政の大獄）や桜田（井伊大老暗殺）などの章を見れば明らかであろう。そこには史的事実についての正確な描写、史的概念についての愛着と確信、個人の精神や生き方への関心という、後の「史伝」の方法論につながるものを見出すことができる。今日的意味における史伝は、鷗外の大正初期の作品（『澀江抽斎』）をもって嚆矢とするのが常識であるが、明治年間に多くの前駆的な作家と作品が現われてい

る。『殉難録稿』は史学畑の作品であるが、その中の有力なものといえるのである。

このような編集者の熱い意図は、本書をしてとかく官製の史書に陥りがちな、無味乾燥な形式主義から免れしむることに成功した。たとえば井伊暗殺に加わって捕らえられた蓮田正実が、取り調べの際に斉昭からの君命が下ったのではないかと問われ、主君に連累が及ぶことを避けようと、「大老井伊氏は、朝旨をおし遏め、祖先の法を壊り、擅に夷狄を近け親藩を擯斥す。是天下の罪人にあらずや。天下の浪人を以て、天下の罪人を討たんに、他人の指図をうくる事やある」と反論する。この箇所は熱誠火を吐くような大文章で、幕末史を転換させた尊攘思想の高揚場面を再現しているといってよい。旧水戸藩から進達された資料をそのまま引き写したのではないことは、文体からも窺える。

自害や処刑の状況を丁寧に後追いし、時には妻子の運命にまで言及する。池田屋事件では、宿の主人が獄中で熱病を発して死亡、七ヶ月営業停止処分になったことまでを記す。おそらく当初からの編集方針ではあったろうが、人を得ないと実現しないものであることは、この種編纂ものに関わった者ならば知るところであろう。

大正四年（一九一五）、森鷗外は澀江抽斎の資料収集のため、人を介して宮内省諸陵寮に住む外崎覚を訪問した。このときはじめて鷗外は、多年謎としてきた澀江道純という人物が、じつは抽斎と同一人であることを教えられ、さらに外崎から津軽で出版された書物からの抜き書きを提供された。鷗外が「東京日日新聞」に『澀江抽斎』の連載をはじめた日は、それから一年足らずであった。

時代背景を重視しつつ、愛情をもった人物の志と生活を簡潔に描くという鷗外史伝の方法を、誰よりも興味深く見ていたのは外崎覚であったような気がしてならない。

明治期の史学と『殉難録稿』

鳥取大学助教授　岸本　覚

実は、はじめて『修補殉難録稿』前・中・後編を読了して非常に驚いた。この宮内省から刊行された著書編集の中心人物の一人には、川田剛（甕江）がいたからである。なぜ私が驚いたかと言えば、この人物を最初に目撃したのが、山口市香山公園毛利敬親の勅撰銅碑であったからだ。瑠璃光寺から洞春寺への途中にあたる香山公園は毛利敬親夫妻・元徳夫妻・元昭夫妻の墓域であり、その前方敷地内に銅碑はある。明治二十九年一月と刻まれたこの銅碑の撰文者は、「宮中顧問官従三位勲四等文学博士川田剛奉勅撰」と記されていた。ここに出てくる川田とはいかなる人物で、どのような関係で撰文にあたったのか、私は幕末の長州藩を研究対象としてきただけにつねに気にかかっていた。

凡例に依れば、『殉難録稿』には二四八〇余人を所載しているという。特徴的なのは、嘉永六（一八五三）年から慶応三（一八六七）年までの事件ごとの幕末人物伝としていることだ。その興味深さは、最初の凡例で述べてあるように、文体について当初は『平家物語』『太平記』のようなものとして構想されていたものが、その後は文章の修飾よりも事実関係の確かさを重視する方向に変ったと書かれている点である。なるほどそのように読むと、そうした工夫が見えなくもない。例えば、坂本直柔（＝坂本龍馬）、中岡道正（＝中岡慎太郎）などの項目には、随所に史料引用が施されている。だが、全体を通じた文体は、事実考証に重きをおいていたというよりも、エピソードを含めた仮名混じりで、一般的な読みやすさを重視したようだ。それゆえ、事件別編修ということもあって、引き込まれるように読んでいってしまう。

しかしながら、このような文体を採用し、しかも宮内省のなかで編纂されたことこそが、明治期の史学を考えるうえでは重要なものなのだ。旧薩摩藩出身の重野安繹の考証史学が明治期史学の中心的存在であったが、川田剛は重野との対立して史局から退き宮内省へと移っていった。川田にとって、宮内省でこの『殉難録稿』を編纂することは、史局では受け入れてもらえなかった自らの歴史編修論を展開する場でもあったのだ。そこには、いかに歴史を記述するかという明治期の史学の特色を見ることができるのではないだろうか。明治期の編修者たちが、幕末期の志士をいかに記述しようとしたのか、こうした近代史学史の一側面として改めて見直してみると、さらに面白く読むことができよう。

読み進めていくことの楽しさもさることながら、私が長州藩主の銅碑撰文と川田剛との関係に頭をめぐらしたように、それぞれの読者が各々の立場から新たな発見をすることも間違いないものと確信する。どんな副産物を得ることができるかは読者が幕末維新とどのように向き合っているかである。